GUNSHIP666

Tetsuo Sano (Vo/Ba)　Masami Toriumi (Gt)
インタビュアー：米沢 彰

“1番大切にしているのは テクニックよりも断然グルーヴ感”

最小ユニットとなる3ピースで 激重サウンドを叩きつけるGUNSHIP666 2ndアルバムをリリース！

ー初めてのインタビューとなりますので、まずはバンドのこれまでの経歴を簡単に伺いたいのですが宜しいでしょうか？

Masami Toriumi(以下、M)：結成は2000年の6月6日の午後6時ですね。

ー午後6時まで！？

M：そうなんですよ（笑）。ヘヴィ・メタルのバンドであることは変わりないんですけど、当初は、ヴォーカルが3人いるバンドでした。でも3人ヴォーカルがいるっていうのは無理があって、1回ライヴをやって1人が辞めて、5人編成でやってました。たまたま向こうのクラブのオーナーの知り合いがいたので、1枚目のデモを作った後すぐにその人づてでアメリカでライヴをやりました。デモインっていうSLIPKNOTの出身の街なんですけど、そこでライヴをするようになってから他のバンドとの関係が広がりましたね。それからTetsuo Sano（Vo/Ba）が入ったあとにアルバムを1枚作ったのが2006～7年くらいですね。それからメンバー・チェンジがあって、2010年には今のメンバーに落ち着きました。

ーPANTERAやSLAYERを彷彿とさせるゴリゴリのメタル・サウンドのGUNSHIP666ですが、お2人のメタルの入り口をそれぞれ伺ってもいいですか？

T：俺はJUDAS PRIEST！
M：私は日本のLOUDNESSですね。高崎さんがLOUDNESS以前の時から、この人のギターは上手いなって子供ながらに思ってました。それで、そのまま成長していって、あとはEdward Van Halenとか、初期のJUDAS PRIESTとか、最初のIRON MAIDENとかですね。

ー今回のリリースはSNOTのメンバーで元SOULFLYのメンバーでもある、 Mikey Dolingをプロデューサーに、PANTERA、HELLYEAHらを手がけたSterling Winfieldをミキサーに起用し、ロサンゼルスでレコーディングを行ってきたとのことですが、どういった経緯で海外レコーディングに踏み切ったのでしょうか？

T：勢いだね（笑）。
ー同：（笑）
M：それもあったのと、Mikeyがたまたまこのアルバムに入っている1曲を聴いてくれてたんですよ。それで“その曲をプロデュースしたい”とMikeyが言ってくれたので、タイミングも良いし、そのまま話を進めていって。日本で録るか、ロサンゼルスで録るかって話になったんですけど、向こうで録った方が環境が良いじゃないですか。電圧の違いとかも私はあると思いますし、それで決めました。

ーMikeyとSterlingを選んだ理由を教えていただけますか？

T：気が合うんですよ、ほんと。それが1番。単純にMikeyがいたSNOT、SOULFLYが好きだったし。
M：センスが良いよね。私たちにはないものがあるっていうか。良いものできるだろうなっていうのは確信してました。
T：Mikeyのメタルの捉え方がオタクっぽくないんです。不良の延長っぽくて。オタクっぽいメタルが俺は嫌いで、そういうのはメタルじゃないって思ってるところもあって……。
M：Mikeyはメタルを論理的に考えてない、ロックな人だからね。

ー今作についてですが、どメタルな骨太のサウンドで終始行くのかと思いきや、ジャズ／ブルース的な洒いパートもあったりとかなりいろいろな試みが散りばめられていて非常に面白いなと思いました。オールド・スクールなメタルというと作風やサウンドの方針が凝り固まっているイメージが強いのですが、こうして自由自在なプロダクションとなったのは意識してのものだったのでしょうか？

M：どちらかと言えば自然ですかね。自分だったらこういう方が聴いてて面白いなっていうイメージがあったので、良い意味で自然に意識して作れた感じですね。
T：俺は全然分かんないです（笑）。気がついたらああいうのになってましたね（笑）。

ー音源を拝聴しましたが、3人編成とは思えない重さと音の密度があるということに加えて、グルーヴ感がバンドのサウンドを1つ上のレベルに引き上げているように感じました。ご自身ではどう思いますか？

T：そう言ってもらえるのは嬉しいですね。
M：アメリカを意識してるとグルーヴ感ってすごい重要になってきますよね。Mikeyもグルーヴ感があって。私たちが1番大切にしているのは、テクニックよりも断然グルーヴ感です。

ーGUNSHIP666の大きな特徴としてMasamiさんの存在は外せないと思いますが、影響を受けたギタリストやアーティストを教えて頂けますか？

M：きっかけはLOUDNESSの高崎さんですね。あの人がギターを弾く姿が子供ながらにかっこよくて。それからGary Moore、Michael Schenkerとかも入ってくるんですけど、簡単に言えば、Darrellとタッカン（高崎晃）が混ざった感じの男っぽい骨太な感じのメタルのギターが好きでしたね。その他にもいろんなことを教えてくれる先輩ギタリストも多かったですね。

ー今回のリリース元となるGOUT RECORDSはどういったレーベルなのでしょうか？

T：“痛風（GOUT）”レコードね。

ー痛風なんですか？

T：痛風です。
M：Mikeyも痛風なんですよ。
T：痛風の痛みを堪えながらつくったアルバムなんです。
M：今日は足が痛い、痛くないから1日のやり取りから始まってたもんね（笑）。
T：“Hey！今日調子どう？”って言うと、“俺ちょっと痛い！”って（笑）。

ーバンドの今後の予定を教えてください。

T：今後の予定？Wacken（Open Air）に出たい（笑）。
ー同：（笑）
M：それは願望でしょ（笑）。アルバム・リリースの後に、9月ライヴがあります。
T：9月にレコ発が決まってるだけですね。アメリカにも行きたいけどこれから決めるところです。
M：単発でも、これを引っ提げて行きたいなって考えているところです。

ー最後に、激ロックの読者に向けてメッセージをお願いします。

T：初めまして！よろしく！毒毒しく不良になれ！
M：（笑）

インタビューの続きは 激ロックウェブサイトをチェック!! >> GEKIROCK.COM

GUNSHIP666
KAMIKAZE FUCK YOU
2014.8.13 ON SALE!!

LABEL：GOUT RECORDS
GENRE：METAL
FOR FANS OF：SLAYER, IRON MAIDEN, PANTERA, SNOT, HELLYEAH

PANTERA、SLAYER直系の骨太メタルを響かせるGUNSHIP666のニュー・アルバム。プロデューサーにSNOTのメンバーであり、SOULFLYなどを手がけたMikey Doling、ミキサーにはPANTERA、HELLYEAHらを手がけたSterling Winfieldを起用しLAでレコーディングしてきたという本作は、大陸的な乾いたメタル・サウンドをグルーヴィなノリで落としこんだ直球メタルを主体としながらも、ギター・ソロではブルージーなフレーズを巧みに取り入れるなど、自由な展開が聴いていて痛快な1枚。メタル愛を持ったリスナーならば、全編通して聴きながらこの自由さにニヤニヤしてしまうだろう。3ピースとは思えない音の厚みとグルーヴ感を弾頭に込めた国産爆撃機、GUNSHIP666の容赦ない爆撃がここから始まる！ **米沢 彰**